
陰陽少女 4

水原 順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽少女4

【Nコード】

N6873Z

【作者名】

水原 順

【あらすじ】

主人公・八神愛子やがみ あいこは、御神楽みかくら小学校に通う、五年生の女の子。八神神社の巫女で、霊能力者である。業界では名の知れた霊能者の両親が全国からの色々な儀式やお祓いの依頼で飛び廻っている間、八神神社を守って奮闘するお話の第4弾

移し身

暗い県道に、チャチャは今夜も、茜の姿で立っていた。小学六年生の、女の子だ。

あまり、多くの車が走っている道ではない。片道一車線の、細い道路だ。お目当ての青い車は、今夜はまだ一台も通って来ない。

住宅街の真ん中を、東から西に貫く様に、道は通っていた。

西の端には、御神楽駅があり、この時間でも結構人は通っているが、今茜が立っている東の端は、夜はほとんど人が通らない。

夜中の一時を回った頃、一台の車が西から走って来た。青い車。茜は、少し眼を細め、微かに笑った。

男の名前は、どうでもいい。二十歳の、大学生だ。

御神楽駅前の、ファミリーストランでアルバイトを終え、車で隣町まで帰る途中だった。

今までは、隣町から電車でアルバイトに通っていたが、念願の車をやっと手に入れた。中古の、小さな車。色は、青だ。今夜は、愛車で初めての通勤だった。

車は、県道を快適に走っていたが、住宅街を通り抜けようとした辺りで、急にエンジンの調子が悪くなってきた。アクセルを踏んでいるのに、スピードが段々落ちてきた。

「おいおい、頼むぜ。こんな時間に、こんな場所で」

男は、嘆きながら、懸命にアクセルを踏んだ。しかし、車は男の意に反して、プスンプスンと、情けない音をたてて、ついに止まってしまった。

「ちえっ。やっぱり、中古は駄目なのかなあ」

男は、車から降りようとせせず、ハンドルに頭を乗せて、突っ伏

してしまった。自分でエンジンルームなど見ても、分かるはずも無い。

「ねえ。私を、覚えてない？」

「うわ！」

急に声を掛けられ、男は大声を上げて、助手席を見た。いつの間に入ったのか、小学生くらいの女の子が座って、男を見ている。

「ななな、何だよお前！」

男は、反射的にドアを開けようとした。開かない。今まで、走っていたのだ。当然、ロックされている。と、するとこの子は、どうやって車内に入ってきたのか。

夜中。県道。幽霊。

そんな言葉が、男の頭に一瞬にして浮かんだ。凍りつき、ガチガチと歯を鳴らす男に、少女が、もう一度聞いた。

「私を、覚えてない？」

男は、声を出す事が出来ず、首を小刻みに左右に振り、知らない事を伝えようとした。とたんに、少女の眼が大きく開き、黒目がギョツと細くなった。同時に、口がカツと開き、鼻の下が割れて、三ツ口となった。真っ赤な口の中に、白い牙が二本、のぞいて見えた。妖怪。

「本当に、知らないか？」

妖怪の言葉を、男は聞いていなかった。髪の毛を逆立て、白目をむいて気絶している。

妖怪は、少し哀しそうな眼をして、チャチャの姿に戻り、そして車内から消えた。

愛子が教室に入ると、教室の隅で開かれていた井戸端会議から、小西あんずが抜け出して、愛子のそばへ来た。

「おはよう、愛子。ねえ、知ってる？また出たんだってさ、例の妖怪」

「おはよう、あんず。知ってるわ。朝、一番に町内会長が家へ来た

から」

ランドセルの中身を、机の中へ移しながら、うんざりしたように愛子が言った。

「退治してくれって?」

あんずの眼が、期待に輝いている。

「何とかしてくれってさ。まあ、アネキに泣き付いて来たんだけどね」

「お姉ちゃんに?じゃあ、どうしてあんたが、そんな仏頂面ぶつちやうめんしてるのよ?」

「聞いてよ、あんず。あの、馬鹿アネキったら、自分が面倒くさいもんだから、町内会長に、『その件でしたら、丁度うちの愛子が、今夜から調べようとしていたところなんです。この子にお任せくだされば、なんの問題もありません』なんて、すました顔して言うのよ。どう思う?」

愛子が、ランドセルの蓋ふたを乱暴に閉じながら、言った。

「ちよつと。ランドセルに、当たらないの。でも、嫌なら断れば良かったじゃない」

「だって、いきなり言われて、一瞬固まっちゃった隙に、町内会長に両手を握られて『本当ですか?助かります。さすがは、我が町内に、八神神社やつかみじんじや有りと言われる神社の、娘さんだ。町内を代表して、感謝します』なんて、ウルウルした眼で見つめられて、あんただったら断れる?」

愛子は、一息に言ってタメ息を吐いた。

「まあ、無理ね。でも、出るのは夜なんでしょ?そんな時間に、大丈夫?」

「出るかどうかも、分からないしね」

「何何、八神?お前が退治しに行くのか?」

二人の話を聞きつけて、お調子者の甲斐俊介かいしゆんすけが、嬉々きき(きき)とした表情で近寄ってきた。その声を聞いて、他のクラスメイトたちも、愛子の周りに集まってきた。

「そうよ。これって、愛ちゃんの出番なんじゃない？」

「明るいスポーツウーマン・鳥谷とりたにつぐみが、愛子の肩に両手を置いて、言った。

「ちょ、ちょっと待ってよ。本当に、妖怪が出たのかどうか、まだ分からないじゃない」

愛子が、つぐみの両手を押しのけながら、言った。

「何言ってるのよ。もう、四件目よ」

「そうだよ。本当に、決まってるじゃん」

みんなが、口々に言った。

「よし！それじゃあ、みんなで確かめに行ってみようぜ！」

クラス一のワンパク坊主・島田健太郎しまだけんたろうが、いかにもワンパク坊主らしい、提案を出した。

「おう、それナイス！なあ、八神。妖怪退治するところ、見せるよ」

「あのねえ、甲斐。愛子は、遊びでやってんじゃないのよ」

あんずが、甲斐と愛子の間に、割って入った。

「なんだよ、小西。お前、八神のマナージャーかよ」

「バーカ。大体、本物の妖怪が、どれだけ恐ろしいか、知らないでしょ？あんななんか、オシッコ漏らして泣いちゃうわよ、きつと。

愛子の、足手まといにしかないわ」

「なにを！じゃあ、八神抜きで行ってやるよ。おい、みんな行くぞ」

「おう、俺も行くぜ」

島田が、甲斐に加勢した。

「じゃあ、あたしも行ってみようかな」

長身のつぐみは、そう言って少し身をかがめ、チラリと舌を出した。

「へへ。じゃあ、あたしも」

後ろで聞いていた、委員長・上小牧美穂かみこまき みほも、参加を表明した。

委員長・美穂の参加をかわきりに、俺も私もと、クラスの半数以上が声を上げた。

「やめた方が、いいよ」

その一言は、それほど大きな声でもないのに、なぜか皆が騒ぐのを止めて、注目した。佐藤理穂^{さとうりほ}。ぽつちやりとした、大柄の女の子だ。クラスで一番の秀才だが、おっとりしていて、おとなしい。

「なんだよ、佐藤。お前、ビビッてんのか？別に、無理について来いなんて、言っつてねえよ」

甲斐が、言いながら手をシッシツと、犬でも追い払う様に振った。「それ、妖怪じゃないよ。水島茜^{みずしまあかね}さんなんだって」
ぼそり、と言った理穂の言葉に、その場の全員が、凍りついた。

水島茜。去年、五年一組の生徒だった。勉強も、良く出来る女の子で、春休みも塾に通っていた。六年生の、新学期に備えて。

春休みの、最後の日。夜の十時に塾を終えた茜は、塾の送迎バス^{そうげい}で、家の前まで送られてきた。

バスの中の友達に手を振って見送り、道路を横切ろうとした茜を、反対車線を走ってきた車が、撥^はねた。

家の前で聞こえた急ブレーキの音に、茜の両親が、慌てて飛び出した。

赤い手さげを放り出して、茜が倒れていた。散らばった教材が、なぜかはつきりと茜の死を告げているように見えた。

父は、茜を抱いて家へ飛び込み、救急車を呼んだ。茜に取り付き、泣き叫ぶ母。小学三年生の妹・美希^{みき}も、必死に姉の名を呼んだ。

門の前に、一匹の黒猫が座っている。黒猫は、たった今起こった事件を、目の前で見ていた。茜が可愛がっていた、チャチャだ。

チャチャは、茜がいつも帰ってくる時間を知っていた。その時間になると、いつもサッシをカリカリと引っ掻いて、外へ出してもらい、門の前で茜を待つのが習慣だった。

塾のバスから、大好きな茜が降りてきて、そして目の前で車に撥ねられた。青い車だった。

チャチャは、車が走り去った方向を、いつまでも見ていたが、やが

て開けっ放しになっていた玄関から家へ入り、茜のそばへやって来た。美希が、茜にすがり付いて、泣いている。チャチャは、茜の頬を一度だけ舐めた。遠くから、救急車のサイレンが聞こえてきた。

新学期早々、悲しいニュースが、朝礼で発表された。よく晴れた、始業式日和の空に、新六年生のすすり泣く声が、一層悲しく聞こえた。

住宅街で起きた事件だが、その時間は人通りもなく、目撃者が居なかった。チャチャを、除いては。水島家の前の、歩道と車道の境目に、小さな花束とお菓子が置かれた。そして、その花束が無くなった頃、事件は迷宮入りめいきゅういりとなってしまう。

「三件目の被害者、あたしの友達のお父さんなんだ。友達について、六年生なんだけど。五年の時、水島さんと同じクラスだった山村ひとみちゃん。水島さんと、仲が良かったらしいよ」

理穂の話は、淡々（たんたん）と続いた。内容は、こうだ。山村ひとみの父が、仕事の帰り道に例の県道を、車で通りかかった。時間は、夜の十時過ぎだった。車の色は、青だ。

住宅街を通り抜ける辺りで、急にエンジンの調子がおかしくなり、ついには止まってしまった。

「どうなってるんだ？ 全く」

ひとみの父は、ぶつぶつ言いながら、携帯電話を取り出し、自宅へかけた。すぐに、妻が出た。

「もしもし。ああ、俺だ。車が、急に止まっちゃったんだよ。ガソリン？」

燃料計に眼をやったが、半分以上入っている。

「十分残ってるよ。エンジンの、トラブルだろう。明日、修理屋に見てもらおうよ。とにかく、ちょっと引っ張りにきてくれないか。場所は……」

ひとみの家には、車が二台有る。母も、買い物などに、よく使うからだ。電話で、現在地を伝えたひとみの父は電話を切り、タバコを取り出して火を点けた。ふう、と一息ついた時、隣にふと気配を感じた。

「うわっ！なんだ、君は？」

小学生の、女の子。悲しそうな顔をしていた。

「私を、覚えてない？」

「ん？」

言われてみれば、どこかで見た顔である。思い出した。何度か、家に来たことがある。

「ああ、水島さんが。ひとみの友達の……」

そこまで言つて、背筋が、凍った。二ヶ月前に、死んでいるはずだ。ひとみが、一週間泣いていた。

「うわあー！」

ひとみの父は、叫びながら車のドアを開けようとした。開かない。ロックされている。ロックを外そうとする指が、かじかんだ様に震えて、上手くいかなかった。

「ひとみちゃんの、お父さん……」

茜はそうつぶやくと、ひとみの父の目の前で、スウツと消えてしまった。

「で、ひとみちゃんのお母さんが来た時には、お父さんは運転席にうずくまって、震えていたんだって。その日から原因不明の熱が出て、今も寝込んでるらしいよ。まあ、あたしはひとみちゃんに、聞いたんだけど」

理穂の、おっとりとした声が、怖さをよけいに際立きわだたせた。

「な、何言ってるんだよ。もし、幽霊だったとしたって、どうして見ただけで熱が出るんだよ？」

理穂に突っかかって行った甲斐だったが、その声は上ずっていた。

「ほらほら、甲斐。声が裏返ってるわよ。強がってんじゃないよ」

「うるせえ、小西。だったら、本当に幽霊かどうか、確かめてみよ

うぜ。なあ、みんな」

あんずの指摘は、凶星だったらしい。甲斐は、ムキになってみんなに呼びかけた。

「や、やっぱ、あたしパスかな…」

つぐみが、ブルツと身震いして言った。スポーツは得意でも、幽霊は苦手らしい。

「俺も、パス。よく考えたら、今日は見たいテレビが有るんだった」
島田も、見え見えの言い訳を理由に、抜けた。ワンパク坊主も、やはり幽霊は苦手なようだ。

『妖怪』が出ると言われると、現実味が無く、お化け屋敷か肝試しのような気分になるらしいが、『幽霊』となり、ましてそれが実際に死んでしまった、身近な人間の幽霊となると、とたんに現実味を帯びていわゆる『気味が悪い』となるようだ。

肝試しのお祭りの雰囲気は、理穂の話で吹き飛んでしまった。バラバラと、参加者が散っていく。

「なんでえ！臆病者共め！」

「じゃああんた、一人で確かめに行くの？」

みんなを罵る甲斐に、あんずがイジワルな笑顔を見せて言った。

「う、うるせえ！一人で行っても、面白くねえだろ！白けちまったよ」

甲斐は、パイとソツポを向いて、教室を出て行ってしまった。

「あははは。甲斐の奴、今の声も裏返ってやんの。ん、愛子どうしたの？」

愛子は、今のやり取りを聞いていなかったらしい。深刻な顔で、考え事をしている。

「ねえ、愛子ってば」

「はっ。ああ、ごめん」

「はっ、じゃないわよ。コワイ顔しちゃって。ねえ、どうしたのよ」

「うん。さっきの話なんだけど、たぶん幽霊じゃないよ」

「幽霊じゃない？じゃあ、なによ？」

「鬼」

「鬼？」

あんずが、眼を丸くして聞いた。

愛子は、黙って頷いた。

山村ひとみの家を出たのは、夕方の五時だった。放課後、すぐに六年一組の教室へ、理穂と一緒に行ったのだ。もちろん、あんずも付いて来たのだが。

「ひとみちゃん、お父さん治るよ。この子が、治してくれるの」

理穂は、そう言って愛子を紹介した。ひとみは、少し困った顔をして見せたが、勢いに押されて、三人を連れて家へ帰った。

母は留守だった。買い物に出かけているらしい。四人は、父が寝ている部屋へ入った。

「やあ、ひとみ。お友達かい？ごめんね、こんな格好で……」

和室に敷いた布団に寝たまま、ひとみの父は弱々しく笑った。

寝込んでいるひとみの父を見て、愛子の顔つきが変わった。幼さが消え、巫女の顔になっている。

「お父さん。お父さんの熱、病気じゃないんだって。この子小さいけど、八神社の巫女さんなんだ。お被はらいしてくれるっていうから、来てもらったの。迷惑だった？」

父は、一瞬驚いた顔を見せたが、娘の気持ちが嬉しくて、すぐに微笑んで首を振った。

「ありがとう。もう、大分たいぶん良くなってきたんだけど。じゃあ、お願いしようかな、小さな巫女さん」

愛子は、ひとみの父に一礼すると、ランドセルを下ろして、ひとみの方へ振り返った。

「やっぱり。ひとみさんのお父さん、瘴せう気に当てられてる。ひとみさん、お湯を沸わかしてくれる？それから、なんでもいいから白い器に、塩を入れて持ってきて」

部屋の窓を開け放ちながら、愛子が言った。

いつもと違う、愛子の顔つきや口調に、理穂は驚いた。ひとみもその雰囲気、下級生という事も忘れて、頼り始めていた。この子、本当に治してくれるかもしれない。

あんずが、白いドンブリに入った塩を持って、部屋へ飛び込んで来た。ひとみは、台所で、お湯を沸かしている。

愛子は、ひとみの父の右側に座った。枕元だ。ポケットから出した麻紐で、髪を後ろでひとくりに縛しばった。

ヒザに、塩の入ったドンブリを載せ、左手で持って、右手の人指し指と中指の二本を立て、中の塩に突き立てた。

「オン コロコロセンドリ マトゲイニ ソワカ」

ゆっくりと呪文を唱えながら、突き立てた二本の指で、塩をかき混ぜ始めた。ひとみの父は、眼を閉じてじっと寝ている。

理穂とあんずが、息を殺して見守っている。

「オン コロコロセンドリ マトゲイニ ソワカ・オン コロコロセンドリ マトゲイニ ソワカ」

愛子は、塩をひとしきり混ぜると、今度は指先に付けた塩を、ひとみの父に塗り始めた。呪文は、まだ唱え続けている。

額ひたい、目蓋まぶた、頬ほお、鼻はなの頭あたま、耳みみ。

塗ったそばから、塩が溶けていく。愛子は、呪文を唱えながら、何度も塩を塗っていった。

「あっ！」

理穂は、思わず声を上げた。ひとみの父の顔全体から、湯気のようなものが出てきたからだ。湯気は、開け放した窓から、どんどん外へ流れていった。

理穂が、となりのあんずに眼をやると、あんずは小さく首を振った。黙って見ている、と言うことらしい。

愛子の呪文がようやく終わった時、ひとみがお湯の入ったヤカンを持って、部屋へ入って来た。

「ここへ、お湯を入れて」

愛子が、まだ塩が残っているドンブリを差し出した。ひとみが、

そこへお湯を注ぐ。

「おじさん。起きて、これ飲んで下さい」

ひとみの父は起き上がり、愛子が差し出したドンブリを受け取って、中の塩湯をゆっくりと飲んだ。

「やっぱりあんた、すごいわねえ。アレで治しちゃうんだもん」

「本当。愛ちゃんって、本物の霊能力者だったんだ。ひとみちゃんに紹介するの、本当は少し不安だったんだ」

夕暮れの帰り道で、理穂とあんずは興奮気味に喋っていた。

「ねえ。ところで、瘴気って何？」

ふと思い出したように、あんずが聞いた。

「ああ、ソレね。鬼や妖怪が、身体から出すオーラって言うか、二オイって言うか、まあ身にまとっている空気みたいなモノよ。それを浴びると、普通の人とは体調が悪くなっちゃうの。吐いたり、熱が出たり。下手したら、死んじゃうこともあるのよ」

あんずと理穂は、思わず顔を見合わせた。

「幽霊を見ちゃって、血圧があがって熱が出るのがあっても、何日も寝込むなんておかしいでしょ？ひとみちゃんのおじさんも、病院へ行っても、原因が分からないって言ってたじゃない。それで、瘴気に当てられたんじゃないかって、思ったのよ」

「なるほどね。それで、鬼か。で、どうするの？」

あんずが、立ち止まって聞いた。

「もちろん、行くわ」

愛子も、立ち止まって答えた。理穂は、映画でも観るような眼で、二人を見ていた。

巫女装束に身を包んだ愛子が、住宅街の外れの県道沿いに現れたのは、九時三十分だった。

背中には卒塔婆を、いや、それに似た木製の霊剣を背負っている。剣の形をした檜の板に、尊勝真言が書いてある。

駅の方には、まだ人通りが多いが、住宅街には、家々の明かりは

点いているものの、人通りはほとんど無かった。

愛子は、道沿いにあつた月極つきぎめの駐車場に、目を付けた。車が、十台位止まっている。

入り口から一番近い車の陰に、愛子はうずくまった。県道沿いに立っているところを誰かに見られたら、自分がその妖怪に間違われてしまうかも知れない。

車の陰で、しばらく待った。

一人で待つのは、退屈だった。愛子は、夜空を見上げた。月も星も見えない。雨でも降りそうな雰囲気だった。

三十分ほど経った頃、愛子は車の陰から立ち上がった。腰が痛くなってきたのだ。

「う……。結構、キツイなあ」

背伸びをしながら、愛子がつぶやいた。その時……。

愛子の位置からは見えないが、はつきりとした妖気が近づいてきた。住宅街の方からだ。

愛子は、ゆっくりと駐車場を歩み出た。

無表情の女の子。これが、茜か。そう言えば、学校で見かけた事がある。

愛子を見て、茜が止まった。夜の県道で、二人は向かい合った。

距離は、五メートル。

茜の、頭の良さそうな顔が、ニッと笑った。ゾクツとするような笑顔だ。

「あたしを、被いに来たってわけね」

「手荒な真似は、したくないんだけど」

茜は、フツとため息をついた。

「あたしも、手荒な真似はしたくないわ。黙って引き上げてくれな
い？」

「そもいかないの。ところであなた、茜さんじゃないんでしょ？
良かったら、事情を話してよ」

「へえ、お見通しなんだ。チャチャって言うの。よろしくね。でも、

あたしの邪魔はさせないよ。人間なんか相談したって、無駄なのは分かっているんだ」

茜の髪が、ザワツと動いた。身体から発する気配が、急に濃くなつた。

愛子が身構える。茜の口が、カツと開いて、真つ赤な口の中が見えた。眼も大きく開かれ、黒目がギユツと細くなる。化け猫。

「猫？」

「そうさ。茜は、あたしを可愛がってくれた。茜は、大切な友達だつたのさ」

ソレは、すでに茜の姿をしてはいなかった。額から、ねじれた角が二本出ている。口は三口に裂け、牙が覗のぞいていた。

「バラキヤソワカ・バラキヤソワカ」

愛子は、左手の人指し指と中指を唇に当てて呪文を唱えながら、靈劍の柄えに右手を掛けた。靈劍と、それを背負う為の紐つなを繋いでいる金の輪わが、キンと音をたてて外れた。

チャチャは、顔の前で両手を構えた。ナイフの様に大きな爪が、ゾロリと並んで光っている。はあっと口から瘴気を吐き、愛子に飛び掛るために、グツと身体を縮めた。

手ごわいのは、靈氣の強さで分かる。愛子は、靈劍を握り締めた。「シャツ」

飛んできた右手の爪を、愛子は靈劍で受けた。瘴気が弾けて、ジユツと音がした。

真つ赤に焼けた鉄にでも触つたように、ギャンツという悲鳴を上げて、チャチャは慌てて手を引いた。

愛子は、靈劍を構え直し、ジリツと前に出た。瘴気を切り続けてチャチャの靈力をそぎ落としていけば、普通の猫に戻るはずだ。

チャチャは、右手をペロリと舐め、両手の爪を引っ込めた。両手を招き猫のように丸めて構える。

愛子が、もう一步踏み込んだ。チャチャが、手をクルリと回すと、愛子の身体もクルリと回って、地面に転がった。

「キヤツ」

愛子は、小さく悲鳴を上げた。地面を転がり、片膝立ちになって、顔の前で霊剣を構えた。

チャチャが、またクルリと手を回す。愛子は、キヤツと悲鳴を上げて、今度は前方にでんぐり返しをさせられた。

体勢を立て直そうとする愛子に対し、チャチャは空中に有る、見えないボールを転がすように、両手を動かした。

「きゃー」

愛子が、地面をグルグル、コロコロと転がり廻る。自分で、身体の制御が出来なかった。段々、眼が回ってきた。

頃合いと見たのか、チャチャは左手だけクルクルと回し続けたまま、右手に再び大きな爪をゾロリと出して構えた。愛子を地面に転がしながら、ゆっくりと近づいていく。

身体の自由が、まるで利かない愛子は、回った眼でチャチャを見た。獲物を見るような眼ではなかった。悲しい眼だ。

本当は、関係ない者を殺したりしたくは無いのだ。ただ、復讐を果たすまでは、邪魔者には容赦しないつもりだろう。

愛子も、このまま殺される訳にはいかない。愛子は、覚悟を決めた。チャチャを、傷つける覚悟だ。

チャチャは、愛子を地面に押し付けるように、左手をグツと地面に向けて下げた。愛子が、地面に釘付けになって止まった。

チャチャが、愛子に右手の爪を振り下ろそうとした時、愛子の髪の毛がふわりと逆立った。

ピシャツと音がして、稲妻がチャチャを打った。
「ギエツ」

チャチャは、全身の毛を逆立てて、ピンと身体を伸ばし、そのままの姿勢で地面に転がった。

愛子の身体が、ようやく自由になった。愛子は立ち上がり、倒れているチャチャに近づいていった。

愛子の耳に、女の子の声がかすかに聞こえた。遠い声だ。

右手の人指し指と、薬指の二本を唇に当てて、瘴気を祓う呪文を唱えようとした愛子を、チャチャが悲しそうな眼で、睨んだ。痺れで、動けないようだ。

「ごめんよう、茜。仇を取れなくなっちゃったよ。茜：茜：」

チャチャは、嗚咽をあげて涙を流した。瘴気を祓えば、普通の猫に戻り、妖怪としての記憶も無くしてしまうだろう。愛子は、唇から指を離した。

また、声が聞こえた。やはり、遠い。

「ねえ、チャチャ。あたしに、一週間くれない？その一週間で、あたしが必ず犯人を捕まえてみせるわ」

チャチャは、愛子の言葉が理解出来なかった。自分を祓うのを、やめるつもりなのか？

「どう言うつもりだい？犯人を見つけたら、あたしは絶対に許さないよ。止めたきや、今ここであたしを殺すなり、封じるなりするんだね」

愛子は、チャチャのそばにしゃがみ込んだ。

「茜さんだって、あなたに犯人を殺して欲しいなんて、思ってないよ。逆に、悲しむと思うんだけど」

「どうして、あなたに分かるのさ？」

チャチャは、カッと眼を見開いて言った。瞳に、青白い炎が燃えている。

「茜は、もう戻って来ないんだ。あたしの、この悲しみは、どうしてくれるのさ！」

そう言って、チャチャは牙をむき出した。瘴気が、再び発散し始める。

「美希ちゃんが、居るじゃない」

茜の、妹。それを聞いて、チャチャの瞳にフツと悲しみの色がよぎった。

「茜さん、きつとあなたと美希ちゃんの事が、心配だと思っな。ほら、聞こえない？さっきから、あなたを呼んでいるよ」

また、聞こえた。チャチャ、帰っておいで。女の子の声。今度は、チャチャにも聞こえたようだ。

住宅街の方からだ。家の窓から、外に向かつて、美希が叫んでいる。親に咎められたのか、すぐに聞こえなくなった。

「あたしは…」

チャチャの額から、角が消えた。

「一週間よ、チャチャ。茜さんの本心も、あなたに聞かせてあげるわ」

チャチャは、愛子を上目遣いに見ると、ゆっくりと四つんばいになった。身体が、縮んでゆく。やがて、小さな黒猫の姿に戻った。本来の、チャチャの姿だ。

チャチャは、一度振り返って愛子を見た。それから、ゆっくりと住宅街の方へ歩いて行った。

「愛ちゃん、マジ?」

「うん。大マジ」

護符しふ駅前えきまえの高級マンション、スカイピアの葵あおいの部屋。テーブルに、葵が出してくれたコーラとポテトチップが載のっている。

「お姉ちゃんって、一般の人には有名ってわけじゃないもん。自分の娘が死んじゃった人に、中学生と小学生が『ひき逃げの犯人を、茜さんの霊に聞いてみる』なんて言っても、怒られるだけだと思うのよ」

愛子が、ポテトチップをバリバリとほおばりながら言った。

「ま、そりゃそうね。汐海しおみ聖子せいこだったら、位牌いはいに触らせてもらえるかもね。あたしがマジ?って言うてるのは、そのアイディアの事じゃなくて、マジで『移うつし身み』をやるのかって事よ」

移し身。死者の魂を、自分の魂と入れ替える術で、そのまま身体を乗っ取られる事もある、危険な術だ。

「チャチャに約束したんだもん。茜さんの本心を聞かせるって」

「そんなことして、何になるのよ?化け猫になっちゃったんだから、

瘴気を被って普通の猫にしちゃえば、いいじゃない」

テーブルに頬杖ほおづえをついて、あきれたように葵が言った。

「茜さんも、チャチャと話がしたいと思うの。もし、茜さんが妹をよろしくってチャチャに頼めば、チャチャも恨みが晴れて、普通の猫に戻れるだろうし」

「あらあら、お優しいことで」

キリツとした顔で言い切った愛子の口の周りに、ポテトチップの食べカスが付いているのを見て、葵が笑って言った。

愛子は、後悔することになるかも知れない。

死んだ者が、この世に帰ってきたら、もう冥界めいかいへ戻るのが嫌になるかもしれない。家族も、姿が変わってもいいから、このままこの世に留とどまって欲しくなるだろう。

葵はそれを、口には出さなかった。愛子が、身を持って知ればいい事だ。

潮海聖子が水島家を訪れたのは、その日の夜だった。

突然訪ねて来た有名人に、茜の両親は驚おどろいていたが、前触れ無しにやってきて『茜の霊を呼び出したいから、協力して欲しい』と言われて、部屋へ通してもらえるのは、やはり日本一の霊能者と言つ、ネームバリューのおかげだろう。

勿論本物ではなく、葵が術によって、自分を聖子に見せているだけなのだが。

リビングの横の和室に、小さな仏壇が置かれていた。花や、お菓子が真新しく供えてある。二ヶ月で、何気ない毎日に戻れるほど、軽い悲しみではないのだろう。

「始めます」

葵はそう言つて、愛子が腰に巻いていた袋から、いくつかの物を取り出した。

白い小鉢。水の入った、瓢箪ひょうたん。人形。

人形は、桃と柳の枝を短く切つたものを、晒さらして包んで、着物を

着せた様に見せた物で、顔は無い。

小鉢に瓢箪の水を入れ、中に人形を立て掛けて、供える。仏壇の両端に、百目口ウソクを点して、用意が整った。

仏壇の前に、巫女装束姿の愛子が、正座した。その後ろに、葵が立つ。その様子を、茜の両親と妹の美希は、和室に入らずリビングからじっと見守っていた。

葵が、靈気を感じてリビングの方をチラリと見た。いつの間にか、黒い猫が和室とリビングの境に座り、こちらを見ていた。チャチャ。愛子が、茜の位牌を手に取り、両手で自分の胸に包む様に押し当てた。眼を閉じ、口の中で、小さく呪文を唱え始める。

「オン カカカ ビサンマエイ ソワカ」
地藏菩薩の真言。

葵は、銀角を右手に持ち、畳をトンと付くような仕草で、上下に振った。銀の輪の束が、サランと鳴った。

口ウソクの火が、ゆらりと動いた。
サラン。

葵が、一定の時間を置いて、規則正しく銀角を上下に振る。

サラン。
口ウソクの火が、ボウツと大きくなった。近い。部屋の空気が、重くなった。

サラン。
小鉢に立て掛けた人形が、重くなった部屋の空気を吸って、青白い光を帯びた。

サラン。
「オン カカカ ビサンマエイ ソワカ・オン カカカ ビサンマエイ ソワカ」

愛子の呪文が、続く。青白い光は、人形から位牌、位牌からやがて愛子に入り込み、愛子の身体から入れ替わりに、何か位牌に入り込んだ。

サラン。

位牌が、一瞬赤く光を帯び、同時に愛子の身体が、青白く光を帯びた。

葵が、銀角の動きを止めた。愛子は、位牌を手から落とし、その場にうつ伏せに倒れた。

「お姉ちゃん……」

美希が、つぶやいた。

愛子の身体が、美希の声に反応したように、ビクンと動いた。

ムクリと起き上がり、辺りを見回す。やがて、リビングからこちらを伺^{うかが}っている水島家の家族に眼を止めた。

「美希……。お母さん、お父さん……」

唇からこぼれてきた声は、愛子のものではなかった。

「茜……。本当に、茜なの？」

茜の母が、恐る恐るといった感じで尋ねた。

「うん。ごめんね、お母さん。あたし、先に死んじゃって」

愛子の眼から、涙が溢れた。

「茜……」

母が、愛子を抱きしめる。その母ごと、父が抱きしめ、それに美希も加わった。全員で、しばらく泣きじゃくる。

チャチャはその輪に入らず、挑むような眼を葵に向けてきた。

「ふうん、なるほど。あんただったら、茜ちゃんも安心して美希ちゃんを任せられそうね」

葵は、チャチャを見て笑って言った。

「さあ、悪いけど時間が無いの。茜さん、あなたを轢^ひいた犯人の家を、教えてくれる？」

葵は、わざと無感情な物言いをした。家族が、愛子から離れた。

「車に轢かれて死んだ人の霊は、その車にしばらく憑^よいちゃうのよね。近くの人？それとも、遠くの人？」

愛子は、悲しそうな眼で葵を見つめ、やがて小さく首を振った。

「どう言う事？」

「あたし、わかりません。もう、いいんです。それより、もう少し

だけお話させて下さい」

葵は、肩をすくめた。時間が経つほど、身体に魂がなじんでくる。この世への執着心も、強くなってくる。

「分かったわ」

もとより、覚悟の上だ。葵は、笑って頷いた。

「チャチャ、おいで」

愛子が膝をついて呼ぶと、チャチャがその上に乗った。

頭をなでる。チャチャは、幸せそうに、眼を閉じた。身体から、瘡気が抜けてきた。

「ごめんね、あたしの為に。でも、もうやめて。あたし、チャチャが人殺しになっちゃったら、悲しいよ」

チャチャは、眼を開けて愛子の顔を見上げた。わずかに残っていた瘡気が、完全に消えた。

「美希を、お願い。チャチャ、今までありがとう」

愛子の眼からこぼれた涙がいくつか、チャチャの顔に落ちた。チャチャは、愛子の頬を一度舐めると、膝から降りた。

「美希」

「お姉ちゃん！」

美希が、泣きながら愛子に抱きついた。

「もう、行っちゃ嫌だよ！」

「美希、しっかりしてよ。いつも、見てるからね。あたしの分まで、親孝行してね」

「お姉ちゃん。この前、ケンカした時、大嫌いっていったの、嘘よ。本当は、お姉ちゃん大好き」

「分かってるわよ、そんな事。いつも、あんたのこと、見てるからね」

二人はしばらく抱き合い、やがて離れて涙顔で笑いあった。

「お父さん、お母さん」

「茜！」

三人で、抱き合った。

「茜、このまま一緒に…」

言いかけた父の口を、愛子が人指し指で塞いだ。

「駄目よ、パパ。そしたら、こうやって身体をかしてくれた子が死んじゃう。この子の、パパやママも同じように悲しむわ」

「茜。ママ、幸せだった。短すぎたけど、あなたと暮らした十一年が、ママの宝よ」

「ありがとう、ママ。ごめんね、突然死んじゃって。あたし、パパとママの子供に生まれて、幸せだったよ。出来れば、もっと生きたかったけど」

父も母も、言葉が出なかった。ただ、涙が止まらない。

「パパ、ママ。犯人を恨むのは、もうやめてね。誰かを恨んで暮らすなんて、悲し過ぎるもんね。約束してくれる？」

「分かった、約束する」

父が、震える声でようやく言った。母も頷いた。

「よかった。ママ、産んでくれて、ありがとう。パパ、ママ。今まで可愛がってくれて、ありがとう」

三人は、固く抱き合って、泣いた。愛子が、コクリと、うなだれた。葵は、そつと眼を閉じた。

動かなくなつた愛子に気付いた両親が、娘の臨終りんしゅうに立ち会つた時のように泣き崩れるくず声を、葵は眼を閉じたまま聞いた。

黒い、漆塗りの門の前で、愛子は茜を待つていた。

周りは闇だが、何故かその門も、そこから遥はるか向こうへ伸びている道も、はつきりと見える。その道を、こちらへ向かって茜が歩いてくるのが、見えた。

「お待たせ、愛ちゃん」

茜が、笑って言った。

「早かったね。もう、いいの？」

「うん。まあ、生き返れる訳じゃないしね。家族に何にも言えずに死んじゃった事だけが、心残りだったから。ありがとう、愛ちゃん」

茜が、漆塗りの門に手を掛けた。

「じゃあ、行くね」

「うん」

茜が、門に力を込めた。闇に、亀裂が走ったように、眩しい光が縦に走った。

その光に茜が吸い込まれると、ビシツと重い音がして、門が閉じた。辺りは、再び闇に包まれた。

愛子は、門に背を向けて、道を歩き始めた。

「あたし、愛ちゃんに教えられちゃったわ」

コンビニで買ったアイスクリームを舐めながら、葵が言った。

「何が？」

愛子も、同じアイスクリームを舐めている。

「あの家族、茜ちゃんが死んで、すごく悲しい思いをしたはずでしょ？なのにもう一回、同じ思いをさせる事になったじゃない？」

「まあね」

「でも、突然死んじやったら、何か言い残したくても、どうしようも無いもんね。すごく泣いてたけど、茜さんもみんなも、あれで良かったのかもね」

「うん」

「冥界の門の前で、茜さんと話したんでしょ？」

「ありがとって、言われたよ」

食べ終わったアイスクリームの棒を舐めながら、愛子が言った。

「ひき逃げの犯人、聞いたの？」

「もちろん」

愛子の表情が、変った。葵は、それに気付いていないように、のんびりとした口調で言った。

「ねえ、愛ちゃん。その犯人、あたしに任せてくれないかなあ？」

「え？」

愛子は、しばらく葵の顔を見つめ、小さくため息をついた。

「お願い、葵ちゃん。あたし、手加減てかげんできないかも知れない」
「オツケイ、決まり。まあ、あたしがしっかり改心させてやるわよ」
葵が、自分の胸をトンと叩いて言った。
半狂乱はんきょうらんになった犯人が、駆け込むように警察に自首して来るのは、
それから五日後の事だった。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6873z/>

陰陽少女 4

2011年12月23日00時54分発行